



# 第八卷第四號

香子

## 話の種子

女高師教授 文部士 下田次郎

子供に好きなる事多し。取りわけ食へること、遊ぶことが最も好きなり。されど、これにもをさく劣らざる好きなることあり、話を聞くこと、則ちこれなり。話はこれに聞き入るときは、子供は食へることも忘るゝほどの好物なり。腹が減れば、食物を求むるが如く、心に何か欲しきときは、「お母さん何ぞお話を」とは、屢々子供より聞く言葉なり。膨の満足と共に、心の満足は興へざるべからず。然るに世の母には、子を育てるとして、食物の撰擇分量與へ方等につきては、一方ならぬ骨を折るに、子に聞かしのむる話については、呆るゝほど平氣なる者少なからざるこそ訝かしけれ。口より入れる身體の食物が大切ならば、耳より入れる心の食物もまた大切にあらずや。身體にのみ結構なる滋養物を取らせて、心には、出鱈目の魚末千萬なる材料を

與へて、それで子を育てるといはるべきか。飯、肴、卵、牛乳等の常食物は勿論、煎餅、餅菓子より、むつかしき名の西洋菓子まで日頃蓄へかきて、間食にも不自由をさせぬほどの母親が、子に話をせがまれば、用意皆無のことゝて、素より話の出来ればこそ、よい加減の胡麻かしをいふて、心の滋養を取らしむべき折角の機会を殺して仕舞ふこそ、残念なれ。母の有つべきものは、着物にわらず、肩掛にあらず、子に聞かすべき話の種なり。

されど唯話の種と有ち居ることが結構とのみは云へず。話も品に依るものにて、下らぬ話ならば、腐るほど有ち居たりとて、却て有害にて、いつそ話のなき方が好まなり。話すほどならば子供の爲になる良き話をせざるべからず。近來昔話お伽譚を始め、話の種本は澤山出来て、雑誌店繪草紙屋の店も賑ふほどなるが、何分にも平凡なる人間の倉末なる頭にて、一夜作りの出鱈目の作が多く、こんな話を謹聴せしめて、子供の清淨無垢なる大切の頭を汚すは、勿體なく情けなく思はるゝなり。

話せば、今少し氣の利きたる、意味ある話をせざるべからず。

凡そ國には言ひ傳へ聞き傳へたる話といふものあり。桃太郎、舌切雀、猿蟹合戦、花咲爺、竹取物語、浦島太郎の如きお伽譚、昔譚は、我が國傳來の話にて、先祖代々親は子に、子は孫に、恰も一家の身代を譲るが如く、日本國民無形の身代として代々に譲り傳へたるものにして、むづかしく言はれ親たるもの、心得、語り聞かすべき義務ある話といふも、大言にあらず。古事記は我國最古の書にして、我が國神代及び上古の事を記し、伯耆の白兔、入岐の大蛇退治、天の岩戸等、子供の喜んで聞く話多く、我等が祖先の氣象、抱負、經綸、建國の由來等を伺ふに足るべき話に満てるものなり。これらの話は、國民の承知しかくべきものにして、親の子に聞かすべき話なり。又我國は歴史古く、國民の誇りとすべき忠孝を始め、その他あらゆる美德の發現せる歴史上の代表的美談佳話に富む。此等のものは、代々話し聞かされたるのみならず、祭祀の本尊となり、芝居、活人形、

